とある×けいおん!!＋オリキャラ達

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある×けいおん！！＋オリキャラ達

【Ｎコード】
Ｎ３５３５Ｚ

【作者名】
神風

【あらすじ】
人が傷つくのが嫌いな少年、水神浬
、浬は魔王の陰謀を阻止することができるのか？
仲間を守り敵を討つ！
少年浬の物語これにて始まり
「俺は、絶対に仲間を守る！！！」

Ｏｐｅｍｉｍｇｕ～第一章　出会い　けいおん！！～

俺は大切な人を守るために戦う

そう誓った少年、水神　浬

俺が守りたいのはお前なんだよ

届かない思いを秘めた少年、檜山　來斗

あたしはこうやってみんなといられるだけで幸せなんだ

幸福を願う少女、平沢　唯

目指せ武道館！

夢を持つ少女、田井中　律

私はこのメンバーで演奏をしたいんだ

仲間思いの少女、秋山　澪

彼女達を傷つける者は私が許しません

友達が傷つくのを嫌う少女、琴吹　紬

それぞれの思いが交差するとき物語の歯車が回りだす。

第一章　けいおん！出会い

Ｍｅｍｂｅｒ～キャラ紹介～（前書き）

初投稿です

暖かい目で見てください

Ｍｅｍｂｅｒ～キャラ紹介～

キャラ紹介

名前　水神（ミナカミ）　浬（カイリ）　転生者

性別　男

髪型　毛先を遊ばせた空色の髪をしている

能力　エレメントマスター〈ＲＡＶＥ〉に氷の属性をプラスした能力を持つ

名前　檜山（ヒヤマ）　來斗（ライト）　転生者

性別　男

髪型　茶色のパーマ

能力　具現のアーク〈FAIRY　TAIL〉

名前　霧崎（キリサキ）　椎名（シイナ）　転生者

性別　女

髪型　赤茶のサイドテール

能力　理想を現実に変える力〈植木の法則〉

名前　アイリ　天使

性別　女

容姿　腰の辺りまで伸ばした緋色

能力　物質創造

Ｍｅｍｂｅｒ～キャラ紹介～（後書き）

今回はキャラ紹介させてもらいました

次回から本編です

Ｌｉｆｅ　ｉｓ　Ｒｅｓｔａｒｔ～水神浬～（前書き）

サブタイトル変更しました。

Ｌｉｆｅ　ｉｓ　Ｒｅｓｔａｒｔ～水神浬～

どうも、どうも、水神浬だぜ！！

突然だけど俺、死にました。

さらに、びっくり、転生します。

しかも、原作に関する、知識が消えちゃうんだって

行き先は、行ってからのお楽しみだってさ

タイトルにかいてあるって？

細かいことは気にしない

それじゃ本編のはじまり、はじまり～

四月某日

高校の始業式が終わって三日目の朝、俺は、ただいま全力で走っている

理由？

学校に遅刻しそうなんだよ！！！

「なんとか間にあった……」

俺は肩で息をしながら『共学』となった私立桜ヶ丘高校の一年一組の教室へ入っていった。

「おはよ〜！浬〜！」

一応友達にして、俺と同じ転生者の檜山來斗が俺に飛びついてきたが……

ドゴッ！！

俺が、來斗を殴り飛ばした。

クラスのみんなは、見慣れた光景なので、來斗が吹っ飛んだことには誰も反応しなかった。

「星になれガチホモが」

「まったく効かないぞ浬！！」

結構本気でやったのに來斗は、何事もなく立ち上がった。

俺もそうだけど、転生したことにより、身体能力が格段に上がってるみたいなんだよね

「ＨＲはじめるから席に着け」

俺が誰もいないほうを見ながら説明をしていると、担任の教師が教室に入ってきた。

そこの君！痛い子なんて言うんじゃない、俺って結構傷つきやすいんだぞ、言うなら心の中にしておけ！

「なに一人でぶつぶつ言ってんだ」

來斗が心配そうな顔をしながら言った。

「状態説明？」

「頭大丈夫か？なんなら保健室まで連れてってやるぞ」

「マジで星になるか？」

拳を構えながら笑顔で言った。

「目が笑ってねぇよ！！」

放課後

俺は、いまだに覚えていない校舎を覚えるためにあちこちを歩いていて今は、どのクラブも使っていない音楽室の前にいた。

「ピアノか……」

最近弾いてないな…弾いてみるか

パチパチパチパチ

俺がピアノを弾き終わると、いつの間にかカチューシャをつけた少女が拍手をしていた。

「軽音部に入ってくれ」

カチューシャをつけた少女がなんの前触れもなく突然言った。

「あんた、誰？」

「あたしは、二組の田井中律、で、答えは？」

「別にいいよ暇だし」

「やった〜！部員確保！！」

田井中は、その場で飛び上がっていた。

どんだけうれしいんだよ

「で、名前は？」

知らないで勧誘したのかよ…

危うくこけそうになったがギリギリでなんとかたえた

「水神浬、クラスは一年一組だよ」

「よろしくな浬、あたしのことは、律でいいよ」

「こちらこそ、よろしく」

「そうと決まれば、部室へいくぞ」

俺は、律に腕を引っ張られる形で部室へ向かった。

「ここが、軽音部の部室だ」

律が部室のドアを開けながら言った。

「遅いじゃないか…って誰だその人は」

ロンゲに黒色の髪をした少女が部室の中から少しだけ怒りながら言った。

「聞いて驚け、新しい部員の水神浬だ」

「本当か？」

黒髪の少女が半信半疑でいるようだった。

信じられてないんだな、助け舟を出してやるか

「今さっき律が言ったけど、今日から、軽音部に入部することになった水神浬です、よろしく」

「秋山澪です、よろしく」

俺が自分で口にしたことで信じたようで黒髪の少女、秋山澪は自己紹介をした。

「楽器は何ができるんだ？」

秋山は人見知りをするらしくびくびくしながら聞いてきた。

「基本的に全部できるよ、でも、その中でも特にってのはベースかな」

「利き腕ってどっち？」

「左だけど」

その瞬間、秋山の目が輝いた。

「ようこそ軽音部へ！歓迎するぞ、それと、私のことは気軽に澪って呼んでくれ」

なんだ！？突然どうしたんだ？

「（同じレフティーに会えたから喜んでんだよ）」

律が、俺の反応を見て、分かったらしく説明してくれた。

意外と空気の読めるみたいだな

俺が心の中で律を褒めていたら、部室の扉が開かれた。

Ｌｉｆｅ　ｉｓ　Ｒｅｓｔａｒｔ～水神浬～（後書き）

次回は転生者の話になります

Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ～転生の意味～

開かれた扉から出てきたのは、目の上にたくあ…じゃなくて、特徴のある眉毛をした少女だった。

「もしかして、入部希望者？今日はラッキーな日だな、もう部員が４人になったよ」

律が相手の話をまったく聞かずに、決めてしまった。

「これで４人って、まさかこの軽音部って廃部寸前だったのか！？」

「律から、何も聞かなかったのか？」

「何も聞いてないよ、入るって言ったら、律が勝手に舞い上がって、そのまま部室につれてこられたし…」

「り～～つ～～！！！」

「い、いや、あの……そうだ、君、なんて名前なの？」

澪から逃げるために先ほど来た少女の名前を聞いた

「琴吹紬です。ムギって呼んでください」

「俺は水神浬です」

「秋山澪です」

「田井中律です」

「楽器は何ができるんだ？」

「楽器？」

律の言葉に、ムギは頭に？マークを浮かべていた。

「軽音部に来たんだから、何か楽器ができるんじゃないのか？」

「え！？ここ軽音部なの？私、合唱部に入部しようと思ったんだけど……」

「え！？そうなのか？誰だよ、ムギが軽音部に入るなんて言ったやつ」

律がそう言って俺らのほうを見た。

「お前だろ、馬鹿でこ！」

「でこのことを言うな、女顔！」

「人の気にしてることを言うんじゃねぇ！！」

「バ浬だって、言ったじゃんか」

「バを付けるんじゃねぇ！」

「ぷ！！」

俺達が言い合いをしていると、突然ムギが吹き出した。

「なんか面白いことでもあったのか？」

半分空気となっていた澪がムギに聞いた。

「二人が、あまりにも面白かったから」

「でこのせいで、ムギに笑われちゃったじゃねえか」

「あたしじゃないよ、バ浬のせいだ！」

「いいわ、私、軽音部に入るわ」

「「「へ！？」」」

ムギの、まさかの発言に、俺達3人は見事なハモリで素っ頓狂な声を上げた。

「ほんとに入ってくれるのか？何で急に？」

いち早く正気に戻った律が聞いた。

でこのくせに一番だと…負けた……

「本当よ、だって二人が面白いんだもん」

「これで部員が４人になった～～～！！」

またもや、律が舞い上がった。

「で、ムギって楽器なにができるんだ？」

一人で舞い上がっている律を無視しながら、澪が聞いた。

「ピアノなら弾けるわ」

Ｐｒｒｒｒｒｒ

俺達が楽しく会話をしていると、その会話裂くかのように俺の携帯がなった。

液晶画面にはアイリと表示されていた。

俺は律達に一言断ってから部室から出た。

「もしもし？」

「浬？」

「そうだよ、また仕事か？」

「いつもごめんね、辛くない？」

「別にいいよ、人助けするのは嫌いじゃないし」

「それじゃよろしくね」

アイリとの電話が切れると俺の目の前にどこ〇もドアが現れた。

律達に少し出かけるといって扉をくぐった。

扉をくぐったさきは、どこかの廃墟らしき場所だった。

そこには、一人の男がいた。

俺と同じ転生者

ただし、悪魔側の転生者が

転生者には2つのパターンがある
悪魔に転生してもらったか天使に転生してもらったかのどちらかのパターンである
ちなみに俺や來斗は後者にあたる
生前、罪を犯していると通常、地獄に落ちることになっている
しかし、選ばれた人間だけが悪魔の願いをかなえることで転生させてもらえることができる
悪魔の願いは……

世界を魔界に変えること

しかし、そうすると悪魔と悪魔に選ばれた転生者以外は魂が消滅してしまう
それを阻止するのが天使に選ばれた転生者、つまり俺や來斗のことである

「お前、天使(あっち)側の転生者だな」

男は、俺を見るなりそう言った。

「だったらどうする？」

あえて男を挑発するように言った。

「天使側の転生者は、全員ぶっ殺す！！！！！」

「バリバリの死亡フラグだぜ、そのセリフ」

「火拳！！」

男の叫びと共に拳の形をした炎の塊が俺のほうに向かってきた。

しかし、俺が手を前に突き出した瞬間、炎の塊は凍りついた。

「な！？」

男に一瞬の隙ができた。

その一瞬の隙に俺は男の懐へもぐりこみ氷の剣を作り出し男の心臓を貫いた。

剣を刺したまま俺は、男から距離をとった。

その瞬間、氷がどんどん広がって行き、最終的に男を氷づけにした。

俺は、携帯をポケットから取り出しアイリに報告をした。

そのあとは行きと同じようにどこ〇もドアで部室に戻ったんだが……

「なんか一人増えてない？」

Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ～転生の意味～（後書き）

律「祝！映画公開～～～！！」

澪「言うの遅くないか？

律「しょうがないじゃん、作者の投稿が遅かったんだし」

作「こっちにもいろいろあるんだよ」

澪「前話のとき言えばよかったんじゃないか？」

作「……」

律「黙ってないでなんか言ってみろよ」

澪「（律が、不良みたいになってる…）」

作「黙秘権を行使します」

律「却下！！」

作「俺に、人権は無いの？」

律「人間だったのか？」

作「真顔で驚くな！ってかキャラ違うくない？」

律「当たり前だろ、こんなときじゃないと崩壊できないんだから」

作「自分で言うな！！もういい帰る！」

澪「どこへ帰るんだろう…」

律「さぁ？てか、作者も帰っちゃたし、お開きにするか」

澪「そうだな」

律澪「「次回もよろしくお願いします」」

Ｌｏｓｅ　Ｔｈｅ　Ｆｉｅｌｄ～仕事失敗～

俺達は、とある音楽店に来ていた。

理由？

さらに増えた部員、平沢唯のギターを買うためだよ。

～回想～

「なんか、一人増えてない？」

部室には、前髪をヘアピンで留めた、ショートボブヘアの少女が増えていた。

「あたしは、平沢唯、よろしくね」

「俺は、水神浬、よろしく」

「突然なんだけど、浬って明日の土曜日会いてる？」

律がカステラの刺さったフォークを持ちながら言った。

「別に、なんも無いけど？」

「楽器店に行こうぜ！！」

「は！？何で」

「唯の、ギター買いに行くんだよ」

～回想終了～

「あたしこれがいい！！」

唯は、そう言って、一本のギター、ギブソン・レスポール・を指差した。

「何でそのギターにしたんだ？」

大体、予想つくけど……

「かわいいから！！」

唯は、満面の笑みで言った。

やっぱりか……

「お金は、持ってるのか？」

澪がそう言いながら、心配そうな顔をした。

「お母さんに、お小遣い前借して、５万円くらい」

「そのギターはいくらなんだ？」

「えっと……２５万円…」

「全然足らないじゃん！」

律のノリ突っ込みが炸裂した。

「しょうがねえな、貸し１だぜ」

俺は、ギブソン・レスポールを持ち、ついでに、アンプやピックをなどを手に取りレジに向かった。

「お会計３０万円でございます」

やったねぴったり！

前世のときから使っていたブラックカードで支払いを済ませた。

「大切に使えよ」

そう言いながら、唯にギブソン・レスポールを渡した。

「「「……」」」

３人は、信じられないものでも見たかのように、固まっていた。

ムギだけはそれが当たり前とでも言いそうな顔をしていたが……

Ｐｒｒｒｒｒ

突然俺の携帯が鳴り、４人は我にかえった。

「また、、仕事？」

「うん…」

「じゃあ、扉よろしく」

「悪い、用事できちゃったからいくわ」

「いってらっしゃ～い」

ムギだけが笑顔でいってくれた。

ほかの3人はいまだに状況整理ができていないようで何か言ったが言葉になっていなかった。

そんなおかしなことしたかな…

どこ〇もドアをくぐると赤茶色の髪をサイドテールにした女がいた。

「あんたが今回の相手？」

女が不敵に笑う

「そうなんじゃないか」

なんつう殺気だよ……

今までの奴とは桁違いだの強さだな

「せめて１０秒はもってよね」

そう言いながら女が拳銃を構えた。

「そんなのが当たるかよ」

「撃ってみないと分からないわよ」

女が引き金を引いた。

俺は横に飛んで避けた……

はずだったが弾丸は急に方向転換をして俺を貫いた。

なんだ今のは！？あれが女の能力か？

「当たらないんじゃなかったの？」

女はそう言いながら腰に刺さっている６本の刀を適当に上空へ投げた。

適当に投げられた刀は、俺のほうへ落ちてきた。

６本の刀すべてが俺を突き刺した。

クソッタレ、急所を避けるのがやっとだ、なんなんだあいつの能力は。

「私の能力が気になってしょうがないみたいね、ま、教えてあげないけど」

女はそう言いながら俺の体から刀を一本引き抜いた。

「ぐっ！！」

「もう、飽きちゃった、死んじゃっていいよ」

女が刀を振りかざすした。

やべえ、もう動けねえや、俺死んだな……

「ばいば～い」

女が刀を振り下ろした。
刀が後数センチで俺に当たるところで……
Ｐｒｒｒｒｒ
女の携帯が鳴った。
「……」
「なんでよ、今からがいいとこなのよ！」
「……」
「くっ！分かったわよ！」
女は、イラつきながら携帯を閉じた。
「命拾いしたわね、でも、次に会ったら、ちゃんと殺してあげるわ」
女は、一度殺気を放ちどこかへ走っていった。
「クソ…ッタレ…」

女が視界からいなくなった瞬間俺は意識を手放した。

「……ここはどこだ？」

起き上がり周りを見渡した。

「病…院か？」

突然扉が開かれて、茶色にパーマのかかった髪をした少年、來斗が入ってきた。

「浬、目がさめたのか！？」

來斗は、俺の顔を見るなりそう言って、ナースコールを押した。

「いったい何があったんだ？人が倒れてるって噂を聞いて興味本位で行ってみれば、浬が血まみれで倒れてるし」

そうか、俺、悪魔側の女と戦って負けたんだっけ……

「浬？」

「悪い、説明は今度するから今は寝かしてくれ」

俺は來斗の返事も聞かず横になり再び眠りについた。

Ｌｏｓｅ　Ｔｈｅ　Ｆｉｅｌｄ～仕事失敗～（後書き）

唯「二回目のゲストは平沢唯と…」

紬「琴吹紬よ」

唯「前は、りっちゃんと澪ちゃんががんばってたからあたし達もがんばろうねムギちゃん」

紬「ええ、がんばりましょう唯ちゃん」

唯「でも、浬君にはおどろいたね、あんな高いギターさらっと買ってくれるんだもんね」

紬「そうかしら、私もあれぐらい、普通だけど」

唯「……」

紬「どうしたの唯ちゃん？」

唯「い、いやなんでもないよ」

紬「ところで唯ちゃんって、律×澪派？」

唯「え！？」

紬「でも、唯×憂も、捨てがたいわね」

唯（「ムギちゃんってもしかして……」）

紬「唯×梓もいいわね」

唯「ムギちゃんが暴走しちゃったから今日はここまでだよ」

唯「次回もよろしくね」

ムギファンの方申し訳ございません。

一応謝っときます

Ｍｅｍｏｒｙ～忘れてはいけないもの～

「絶対に私を守ってね、約束だよ」

藍色の髪をした少女がそう言って空色の髪をした少年に微笑んだ。

「約束する、俺がお前を絶対に守る！」

少年はそう言って少女を抱き寄せた。

「ダッタラナンデワタシハシンダノ？マモッテクレルンジャナイノ？」

少女がそういった瞬間、あたりは真っ暗な空間に変わり、少女は体中から血を噴き出し少年の腕の中で崩れた。

「俺は、あいつを守れなかった…」

お前のせいで死んだんだ

「俺のせい？」

お前が勝手なことをしなければ彼女は生きていた

「違う！俺は守ろうとしたんだ」

ならばなぜ死んだ

「守ろうとしたんだ、けどあいつが……」」

彼女が死んだのはお前のせいだ

ほかの誰でもないお前のせいだ

逃げるな罪を償え

「…り…かい…」

どこからか声が聞こえ一点の光が差し込んだ。

俺は声から逃げるように光へ走った。

「浬！！おい、浬！！」

光から抜け出した先は病院だった。

「大丈夫か？目茶苦茶うなされて心配したんだぞ」

來斗がそう言って水の入ったコップを差し出した。

夢…か…いや、正確には夢じゃないな

「大丈夫、嫌な夢見ただけだよ」

來斗からコップを受け取り水を飲み干した

「じゃあ、そろそろなんで倒れてたか教えてほしいんだが」

こいつタイミング悪すぎるだろ

「はぁ……分かったよ」

俺は、來斗に女の容姿、武器、そしていまだに理解できない能力、すべてを話した。

「なるほどな、そんな強い奴がいるんだな、しかも何も分かんない女か……」

「浬が目を覚ましたって本当か？」

俺達が頭を悩ませていると、扉が開かれ軽音部のメンバーが肩で息をしながら入ってきた。

病院を走るなよ、と言おうと思ったがいえなかった。

みんなの顔を見ると何も言えなかった、澪に限っては目が潤んでいた。

「ごめん、心配かけた」

俺には、それしか言えなかった。

「この間はありがとう」

唯が一歩前に出て頭を下げた。

ギターのことか？

「別にいいよ、早くみんなと演奏したかったし、それよりさ、俺ってどれ位寝てたんだ？」

「一週間ちょいかな」

「え！？俺そんなに寝てたのか！」

「それに浬が寝てる間に中間が終わったから補修扱いになってるぞ」

來斗がニヤニヤしながらいった。

「あたしと同じだね」

唯はなぜか笑顔だった。

「いつ退院できるんだ」

律が來斗が持ってきたと思われる俺の見舞いを食いながら言った。

別に腹は減ってないからいいけどなんか腹立つ

「明日にはできるってさ」

そう言いながら律からりんごを取りあげた。

「私のりんご返せ！」

「俺のだよ！」

「意外と元気だな」

澪がそう言いながら律の頭を叩いた。

「まあな、元気なのが取り柄だし」

「じゃあ、あたし達は帰るよ、唯に勉強教えなくちゃいけないし」

「え～、もうちょっとここにいようよ、せっかく浬君が目を覚ましたんだよ」

唯となぜかムギがぶーぶー言った。

「勉強したくない理由に俺を使うんじゃない」

「「ぶーぶー」」

だから、なぜムギまでやるんだよ……

「さあ、帰るぞ」

澪と律が唯とムギを引っ張りながら俺の病室を出ていった。

「お前はそんなとこでなにしてんの？」

なぜか來斗は部屋の隅でひざを抱えて負のオーラを放っていた。

だってさ、突然女の子の集団が来てさ、楽しくしゃべり始めてさ、なんか俺空気じゃねって思ってさ……」

なんだ寂しかったのか、こいつ…

「何時の間にあんなかわいい子達と知り合いになったんだよ！！！」

「ただの妬みじゃねえか！！少しだけ同情した俺が馬鹿だったよ！！！」

「ずるいんだよ！！」

「もう帰れよ、お前！！」

「ずるい「うるせー！！」

俺は來斗を窓から外へ投げ飛ばした。

まあ転生者だし大丈夫だろ、ここ3階だけど……

その日病院の入院患者が増えたらしい、誰かはわからないけどお大事に。

「ようやく目が覚めたんだね」

その日の夜、どこ〇もドアが現れアイリが俺のところに来た。

「本体で来るなんて珍しいじゃん」

「ちゃんと会って聞きたいことがあったから…」

「聞きたいこと？」

アイリの言葉に俺は首をかしげた。

「うん、最近調子どうかなって」

「体調ならもう全然大丈夫だけど」

「そういうことじゃなくて……」

「？？？」

「やっぱりいいや、ごめんね突然変な話して、お休み」

アイリは俺の返事も聞かずにどこ〇もドアで帰ってしまった。

なんだったんだ？

アイリのことは気になったがそれ以上に眠気が強く眠ることにした。

Ｍｅｍｏｒｙ～忘れてはいけないもの～（後書き）

浬「浬だぜ！」

來「來斗だぜ！」

浬「今回の話って必要だったのか？」

來「確かに内容的にはまったく進んでないよな…」

浬「禁書のキャラもまだ一人も出てないし」

作「お前ら言い過ぎじゃね」

浬「でも、俺ら事実しか言ってないぞ」

作「それは……」

來「おまけに駄文だし」

作「うわーん、もう帰る」

浬「メンタル弱すぎじゃね」

來「確かに」

浬「そろそろお開きか？」

來「そうだな」

浬來「「次回もよろしく」」

Ｍｅｅｔｉｎｇ　Ｓｔｕｄｙ～勉強会～

「支度はできた？」

俺のこの世界での母親がベットを掃除しながら言った。

ようやく退院できるぜ、ずっと寝たきりも結構きついからな

「ああ、できたよ」

「じゃあ、退院の手続きしてくるわね」

「じゃあ、俺は先に帰ってるから」

俺は母親より先に部屋を出た。

この世界の家族も前世の家族もあまり好きじゃないんだよね

「「「「「退院おめでとう！！」」」」」

外へ出ると軽音部のメンバーが待ってくれていた。

來斗は複雑骨折で入院してるらしい、人がせっかく退院するってのに何をやってんだろね、あいつは

「じゃあ早速みんなで演奏しようぜ」

「その前に勉強しないと駄目だろ」

俺の提案を澪が否定する。

「何でそんなことしなくちゃいけないんだ？」

「なんだもう忘れたのかよ、浬は補修だろ」

律がニヤニヤしている。

「そんなことしなくてもテストくらい余裕だろ」

「「「「え！？」」」」

４人の声が見事にハモった。

「あ！でも唯が勉強しなくちゃいけないんだよな」

「「「「……」」」」

「どうしたんだよ、最近ぼーっとしすぎだぞ」

「勉強教えてください」

「やだよ、めんどくさい」

唯渾身のＤＯＧＥＺＡ！！

「やめろって、俺が悪者みたいじゃねぇか」

「じゃあ勉強教えてくれる？」

「分かったよ、教えてやるよ」

信念弱すぎじゃね俺…

「だからそこはこうやってやるんだよ」

ただいま唯の家で軽音部メンバーでお勉強会中〜！！

唯に数学を教えてるんだが結構てこずっている、もっと簡単にいくと思ったら唯が思いのほか出来ない…

「そろそろお茶にしようよ～」

「まだ一問も出来てねぇじゃねぇか」

「かいちゃんスパルタすぎだよ～」

「唯が出来てねぇだけだよ、ってか、かいちゃんって何だよ」

「浬だからかいちゃんだよ」

「変なあだ名つけるんじゃねぇ！」

「いいじゃん、似合ってるぜかいちゃん」

律が冷やかしてきた。

「そりゃどうも、でこちんちゃん」

「でこのこと言うな！」

「いいじゃねぇか、似合ってるぜ、なあ、澪」

「わ、私に振らないでくれ」

かなりあせる澪、こいつからかうのおもしれぇ～

「と、とりあえず、勉強をしましょ」

「そうだな」

ムギの一言でみんなまじめに勉強会を再開した。

勉強会から転生者も女も現れず平和に一週間が過ぎた。

「ようやく終わった～～～！！！」

俺は追試が終わると共に教室で叫んだ。

「出来はどんな感じ？」

俺の追試終了の時間を見計らい教室に入ってきた

「楽勝～♪」

「お前は相変わらず頭いいんだな」

「これくらい普通じゃね」

「全然普通じゃねえよ！」

「んじゃ、俺は部室に行くぜ」

これでようやくみんなで演奏できるぜ！！！！

そんなことを考えながら部室を目指した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3535z/

とある×けいおん!!＋オリキャラ達

2012年1月6日15時47分発行